



高橋昭彦(排除しない考え方をわが国に広めた一人である)

山を遠くから見て桜がある
と分かるのは、春の時期であ
る。ああ、そこにいたんだね、
きれいだね、と声を掛けたく
なる。でも花が散ると、茂る
緑の中で桜を見失う。花が咲
くのは桜だけでない。秋には
モミジも色づくし、冬のケヤ
キの枝ぶりには目を見張る。
山に多様な植物が育つよう
に、私たちの社会にも多様な
人がいる。障害や病気を理由
に排除しない、人種、性的志
向、容姿や外見、考え方で差
別しないと聞いてはいても、
理解は十分だろうか。

炭谷茂さんが、旧厚生省の
官僚だった時のことである。
炭谷さんが英国に行った際、
現地では子どもの虐待につい
ての対策が始まっていた。そ
れを聞いた炭谷さんは「日本
には子どもの虐待はない」と
言った。しかし、現地の人か
ら「それはあなたが知らない

多様性を認め合おう社会に

だけだ。日本にも虐待を受け
ている子どもは必ずいる」と
返された。帰国後、そのこと
が気になって仕方なかった炭
谷さんが調べたところ、日本
にも虐待を受けている子ども
がいることが分かった。
わが国で児童相談所におけ
る児童虐待相談対応件数の統

計が始まったのは1990年
度。当時1101件だった相
談件数は、2020年度には
20万余件と年々増えている。
児童虐待の原因は、子どもに
病気や障害がある、親に被虐
待経験や育児不安がある、家
族に貧困や地域からの孤立、
不安定な夫婦関係があるなど

た。懇親会に参加した時も手
話通訳者が付いてくれた。や
がて2次会に誘われ、私はあ
まり深く考えずに参加した。
手話通訳者が帰ると、あたり
は一変した。皆が会場のあち
こちで手話で会話を始め、手
話で相づちをうち、楽しそう
に笑う。私は会話を全くつい
ていけず、とてつもない疎外
感と制限を感じた。
そこでは、聞くことも話す
こともできない私が障害者だ
った。立場が逆転した体験か
ら、私は今のところ、たまた
ま障害がないだけだと思っ
うになった。自分で障害のあ
る、なしを選ぶことはできな
い。それは確率の問題であ
る。健常だと思っている人
は、今のところたまたま障害
を持つ確率から外れているに
すぎない。確率に当たってし
まった人を、外れた人が支援
するのは普通のことではない
か。

ただ、私たちが住む地域のどこか
に、生きづらさ、生きにくさ
を感じている子どもがいる。
大切なのは、子どもを見失わ
ないこと。その子どもや家庭
に関心を持ち、できることを
する、そんな大人が増えてほ
しい。子どもたちには、いい
大人がたくさんいることも知
ってほしい。子どもが子ども
らしくあるために、私たちに
できることはたくさんある。

ろう重複児者の会が05年、
宇都宮市のろまんちっく村で
開かれた。私は手話ができな
かったが、傍らの手話通訳者
のおかげで無事に講話を終え

る。NPO法人うりずん理事

長